

ハンドボール

特集

第19回世界女子選手権大会

第61回 全日本総合選手権大会

男子52回・女子45回全日本学生選手権大会

1.25

JAN.FEB.2010・No.507



[表紙写真：全日本総合選手権大会・女子の部でMVPに輝いたオムロン・藤間選手]

財団法人 日本ハンドボール協会

<http://www.handball.jp/>



molten[®]
For the real game



For the real game

「プレーヤーの技術や意志が100%発揮される時、スポーツは本物になる」

私たちモルテン・ブランドは、この信念をもとに

世界に類のないボールと

スポーツエキップメント・メーカーとして

つねに完璧な製品づくりを目指しています。

日本リーグ唯一の公式試合球
全日本実業団連盟主催大会
唯一の公式試合球

H312 ヌエバ 国際公認球 検定球

縫い・人工皮革、3号球、ラテックスチューブ

H212 ヌエバ 国際公認球 検定球

縫い・人工皮革、2号球、ラテックスチューブ



www.molten.co.jp

株式会社 **モルテン** 東京本社 〒130-0003 東京都墨田区横川五丁目5-7

世界を奪い返す あと700日!!



(財)日本ハンドボール協会専務理事 川上 憲太

皆様、明けましておめでとうございます。このメッセージが皆様のもとに届く頃は、すでに年明けから1ヶ月を過ぎ、男子・日本代表チームはレバノン（バイルート）でアジア選手権に挑戦している時であります。酒巻監督のもと昨年1年間、過酷なまでのフィジカルトレーニングを積み、ロンドンまでの中間点・アジア選手権に挑みます。本大会は、世界選手権予選であり、まずはアジア代表になり、世界への切符をとることが義務付けられています。

ロンドンオリンピック予選は、2012年のオリンピック本大会の6ヶ月以前までに各大陸予選を終えていなければなりません。従って、予選大会まであと約700日となってくるわけです。「まだ700日もある」ととらえるか、「もう700日しかない」ととらえるか、であります。この700日の間にはたくさんの事が想像できます。充分すぎるほどの綿密な計画のもとにチーム作りを行うことは勿論ですが、思わぬアクシデントは必ずあります。また、素晴らしい戦力の台頭や新しい状況の変化もこれからです。そこには非常に繊細な心配りと大胆な決断が必要となります。「ロンドンまで700日計画」をきちんと推進する意味でもこのアジア選手権の内容・結果を重視したいと思っています。

女子・日本代表は昨年12月の世界選手権・予選リーグでヨーロッパの強豪と戦い、予選リーグ突破ができませんでした。課題は明確になりました。第一が体力・スタミナ、第二が1対1・ノーマークです。西窪強化本部長は「いやというほど痛感しました」と帰国後語ってくれました。あと700日であります。

日本ハンドボール協会は、北京オリンピック世界最終予選を終了してから、「すべてのベクトルを強化に向ける」の方針の基で事業計画を推進しています。これは、たとえば普及本部における「小学生・中学生のチーム拡大・大会充実」の活動ですが、これが一貫指導システムを軸に11年目を迎えたNTS（ナショナルトレーニングシステム）の「見つけて・育てる」の目標の土台となり、「鍛える」部分を担うJHAジュニア・アカデミーへとつながり、トップ強化への大きな成果に結びつきます。昨年、日本ユース代表がアジア大会で好成績をあげたことなど次世代への期待が膨らむ所でもあります。マーケティング・広報・財務・競技・総合企画・20万人会等の事業も必ず「ベクトルが強化に向けられているか」を軸に活動しております。

昨年、IHF（国際ハンドボール連盟）もAHF（アジアハンドボール連盟）、EAHF（東アジアハンドボール連盟）も新しい人事が発表され、日本もその一員として指名されました。4年間はこの体制の基で運営されます。しかし、日本協会の国際ハンドボール界における地位・発言力・リーダーシップ、いわゆる「国際力」はまだまだ足りません。原因は明らかでありますので、「国際力アップ」に努力していく所存であります。2年前に起こった北京オリンピック予選の「やり直し大会」の根本的な原因については、一朝一夕に解決できないと思いますが、一つ一つの国際会議・国際大会を通じて各国と共に行動を起こし、こつこつと行動していくことだと考え、実行しているところであります。

また、日本協会の大きな基盤となっている「社会人」の競技者の存在を顕在化し、活性化をはかるために「社会人連盟の設立」が急務となっています。現在、既存の日本実業団連盟、日本学生連盟等の他に、日本リーグもクラブチームの存在が大きくなり、大学の中にも同好会・クラブチームがたくさんあり、全国都道府県には所属の会社や大学の枠をこえたクラブチームの存在は益々拡大傾向にあります。そして、きちんと把握できていないことも現状です。また、クラブチームへの参加を希望する人も多いと想像しています。とりあえず、次年度は現状を踏まえた中で「社会人連盟」という大きな枠の中へ「包み込み」、出来るだけ早い段階で全体組織を作り上げ、登録・大会等の「しくみの改正」を行い、日本ハンドボール協会の基盤の充実に役立てたいと考えています。そして近い将来にはしくみに則った日本選手権大会を開催したいと考えております。皆様のご理解ご協力をお願い申し上げます。

今年は、ハンドボールに限らず日本スポーツ界にとっては大変厳しい年になりそうですが、「こういう時こそハンドボールが、スポーツが必要」だと思えます。日本のハンドボールを支えて下さった、たくさんの諸先輩の努力を思い起こしながら、皆様と共にチームワーク良く頑張る所存であります。今年も宜しく願い申し上げます。

第19回 世界女子 ハンドボール 選手権大会

〈最終順位〉

優勝	ロシア	13位	スウェーデン
2位	フランス	14位	チュニジア
3位	ノルウェー	15位	ブラジル
4位	スペイン	16位	日本
5位	デンマーク	17位	ウクライナ
6位	韓国	18位	コートジボアール
7位	ドイツ	19位	アルゼンチン
8位	ルーマニア	20位	コンゴ
9位	ハンガリー	21位	タイ
10位	オーストリア	22位	カザフスタン
11位	アンゴラ	23位	チリ
12位	中国	24位	オーストラリア

日本選手団 団長 山下 泉

一つ、観客は毎試合100人未満と盛り上がりには欠けた大会であり、中国の出場したDグループの常州も同様であったと聞いた。IHFは中国協会に対して観客数についてきびしく指摘したことを知らされた。

運営能力については北京五輪を成功させた自信が感じられるレベルの高さを見ることが出来た。

3. ITハンドボールの推進

各会場の公式記録は試合終了20分後には詳細なデータが発信され、日本でも同時にインターネットで見ることが可能であった。誌面の都合でその一部を掲載する(次頁)。

現在、日本協会、日本リーグで使用されている公式記録用紙は極めて簡単なものであり大きく世界から遅れをとっていると云える。以前から電算、競技の担当理事に改善の提案をして来たが、オフィシャル人員が沢山必要になるという理由で今日まで実現していない。因みに中国では5人が担当していた。

ITハンドボールを指向する為にはより詳細なデータの提供が重要な要素となる。強化を考えると現状の大雑把な記録用紙では分析することも不可能である。

4. 体格と国際試合経験の比較(平均)

国名	身長 cm	体重 kg	出場試合数
日本	167.7	63.1	24
ノルウェー	177.2	—	80
ルーマニア	177.4	70.4	72
ハンガリー	176.7	67.0	48
チリ	165.1	63.9	5
アルゼンチン	171.8	67.9	53
ブラジル	171.8	69.1	42
カザフスタン	178.9	69.9	—
韓国	171.8	63.4	—
中国	179.8	67.9	52
チュニジア、コートジボアール	は記録なし		

2点共 写真提供・スポーツイベント社



1. 大会概要

12月5日から20日まで、中国上海近郊の江蘇省の6都市で開催された。参加24ヶ国が4グループ・6ヶ国に分かれて予選リーグを戦った。前回19位の日本はノルウェー(2位)、ルーマニア(4位)、ハンガリー(8位)、チュニジア(15位)とチリ(初参加)のCグループ、蘇州市体育館で行なわれた。強敵のヨーロッパ3国のうち1つは必ず勝利しなければ決勝リーグ(ベスト12)に進出出来ないという非常に苛酷なグループであった。結果は1勝3敗1分の4位で悲願は達成出来ず順位決定リーグに回り、このリーグも2勝2敗で最終的に16位となり、前回大会より3順位上げたが満足出来る結果は得られなかった。負け惜しみになるがハンガリー戦は勝てる内容の試合であり、経験の差による詰の甘さが出て快挙を達成することが出来なかった。※()は前大会順位

2. 大会運営

蘇州市体育館は、昨年4月実施の東アジアクラブ選手権大会の男子会場であった。他の会場は高速道路で2~3時間の遠距離にあり、視察することは不可能であった為、運営の状況は不明であるが蘇州会場は宿泊、食事、輸送、通訳、会場設備、記録速報は十分に満足出来る状況であった。ただ

写真提供・スポーツイベント社





Suzhou
SUN 6 DEC 2009
21:15

XIX Women's World Championship 2009
China
Preliminary Round Group C



Spectators: 200

Match Team Statistics
Match No: 21 **JPN 28 - 37 ROU**
(17 - 17) (11 - 20)

Referees: BRUNOVSKY P / CANDA V (SVK)

JPN - Japan

No.	Name	Shots										Offence			Defence			Penalties			TP
		G/S	%	6m	Wing	9m	7m	FB	BT	AS	TF	ST	BS	YC	2Min	RC	EX				
3	TAKAHASHI Megumi																				0.16
5	ITO Aimi																				21.01
6	UEGAKI Akira	8/14	57	1/3		2/6	1/1	3/3	1/1	2	8										45.27
7	SHINJO Akina	2/4	50		2/4						2										58.54
8	SAKUGAWA Hiromi	5/7	71		4/5					1/2	1	2									60.00
9	SAKAMOTO Tomoko	1/2	50							1/2	2	1				1	1				37.20
10	FUJII Shio	5/10	50	0/3	1/2	0/1	4/4				5	3	1								2.48
11	NAKASONE Aya	1/4	25	1/3						0/1											3.09
16	TASHIRO Hiromi																				46.46
17	ARIHAMA Yuko	5/13	38	0/6	1/1	1/3				3/3	4			2	1	1					57.33
20	ISHITATE Mayuko																				6.01
22	FUJIMA Kaori																				13.14
25	TANABE Yuki	0/1	0		0/1																14.33
Bench/Team																					
Totals		28/56	50	3/16	8/13	3/10	5/5	5/6	4/4	14	19	3	1	3	1	0	0				

No.	Name	Total Shots		6m Shots		Wing Shots		9m Shots		7m Shots		Fast Breaks		Breakthroughs	
		S/S	%	S/S	%	S/S	%	S/S	%	S/S	%	S/S	%	S/S	%
16	TASHIRO Hiromi	8/34	24	4/9	44	1/6	17	1/5	20	1/3	33	1/4	25	0/7	0
22	FUJIMA Kaori	1/12	8	0/2	0	1/3	33	0/1	0	0/2	0	0/2	0	0/2	0
Totals		9/46	20	4/11	36	2/8	22	1/6	17	1/5	20	1/6	17	0/9	0

Team Shots	Goals	Saves	Missed	Post	Blocked	Total	%
6m Shots	3	4	3	2	4	16	19
Wing Shots	8	4	0	1	0	13	62
9m Shots	3	5	1	1	0	10	30
7m Shots	5	0	0	0	n/a	5	100
Fast Breaks	5	2	1	0	0	8	63
Breakthroughs	4	0	0	0	0	4	100
Totals	28	15	5	4	4	56	50

Number of Attacks: 70, Scoring Efficiency: 40%

この比較を見てどう感じられるかを問いたい。強化方針を確立し、長期的視野に立って構造改革を進めるかが必要である。格闘技であるハンドは体力の差が大きなハンディキャップとなるのは明白である。世界との体格の差は開くばかりと感じており、男子チームも同様である。中、高、大で考えると目先の勝利にとらわれ、小さくても器用な選手を重用される傾向がある。世界と戦うには大型選手の発掘が必須条件であり、その為にはバレーやバスケット界の選手をハンドへの転向を呼びかける位の熱意が必要であり、そして辛抱強く育成することを提案したい。世界の 185cm のプレイヤーは早く走れ、フェイントも出来る運動能力を持っている。日本の選手が 3 人で守っても引摺れるだけの体力があり、しかもシュート力も有している。今大会の戦ったどの試合も後半の体力消耗度が目立った。今やヨーロッパだけでなく南米やアフリカ勢も強化が進んでおり、日本の現状を考えると焦燥感を抱かざるをえない。強化指定選手は必ず海外に挑戦させ、世界を数多く経験させなければ明日はない。

5. 戦略面に対する私見

オリンピック出場、世界選手権上位入賞を日本ハンド界が目指すことが第一の目標である。したがってこの大会は集大成の舞台、いわば決戦場であるべきであり、その為には選ばれた監督、選手が一体となり勝利を目指す責務がある。選手の起用、作戦をどう展開するか監督の責任として果たすことが宿命であり、他の人が口出しする余地は無いことを十分承知の上で意見を述べたい。それだけでなく得点力の劣る日本選手の中で日本リーグの得点王で最も期待されるべき選手を 14 名のベンチから外すことはどう考えても不可解である。当然に経験のない新人を投入してよい結果は得られなかった。日本の代表として是が非でも勝つという執念が欠如していたとしか言えない。



Suzhou
SUN 6 DEC 2009
21:15

XIX Women's World Championship 2009
China
Preliminary Round Group C



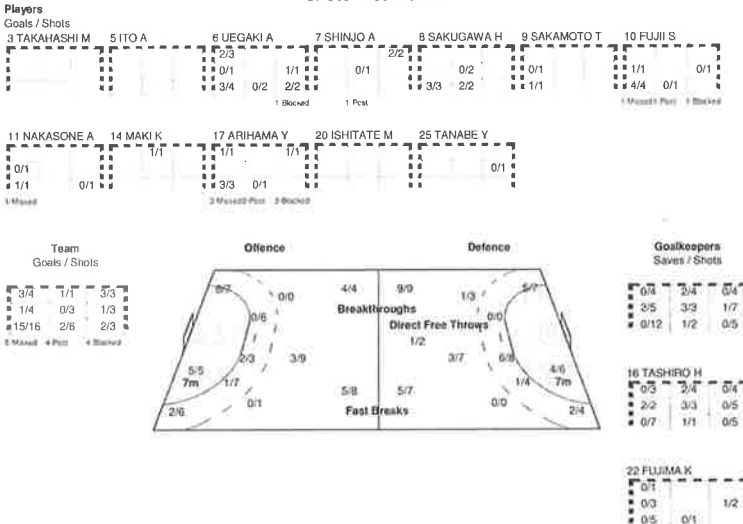
Spectators: 200

Match Team Statistics
Match No: 21 **JPN 28 - 37 ROU**
(17 - 17) (11 - 20)

Referees: BRUNOVSKY P / CANDA V (SVK)

JPN - Japan

Shots Distribution



最終的に 3 つ順位を上げたことにより、よく戦った、惜しかったと言えるかも知れないが、もう 20 年以上も同じ言葉で反省し、慰めあってきたのが強化の現場である。今こそ大改革を進める必要がある。世界の各国の強化は大きく進んでおり、止まっていたはくれない。現状では先の希望は見えない。

苦言を述べましたが日本を強化する為に私自身の反省を込めての意見であり、お許し願いたい。

世界選手権を終えて

女子代表ヘッドコーチ 黄 慶泳

大会の準備について

女子代表チームは世界選手権を準備するに当たって重点強化ポイントとして考えたのは、トータルフィットネス強化(スピード、パワー、スタミナ) & テクニック(スキル、ゲームマネジメント力)を身に付ける事でした。

1時間戦うためのスタミナ強化は勿論、試合の流れ、戦術変化に対応出来る試合運営テクニックを身に着けて、チーム全員が意識共有しながら試合を運ぶことでありました。

その為に、NTCの施設と器具を利用してフィジカルを強化し、国内男子高校との練習ゲーム、海外遠征(国際試合経験)を企画・実施してまいりました。特に高校男子とのゲーム、海外遠征での国際試合経験は、大型対策と戦術変化を感じて対応出来る組織力強化に良いトレーニングでしたし、貴重な経験であったと感じます。

選手選考については、4月から7月までの間には若手育成と底上げをテーマとして取り組み、大会の直前合宿から(11月11日)は国際試合経験が豊富であるベテランを若手と融合させて準備する流れで世界選手権を迎えました。

世界選手権について

初戦のノルウェー戦においては、日本は勢いがありましたが、ノルウェーの守りから速攻に転じる時のチャンスを作り出す想像力・判断力とスピードは世界一のものを実感しましたし、その違いが敗因の要因でもありました。

第2戦はルーマニアの気力に負けずに後半中盤までは優位に試合を運べていて全員が一つになって戦っていました。

結果は負けでしたが、試合内容と選手の戦いぶりは収穫が沢山あったと思います。

第3戦のアフリカ勢チュニジアとの試合は、独特な柔軟性とパワー持っている相手に選手のファイティングスピリットは素晴らしかったと思います。しかし、後半の疲れと試合マネジメントの経験不足もあって引き分けで終わったのは非常に残念でしたし、大きな課題を残した試合でもありました。

第4戦の南米チリとの試合は順調に勝ち星を得て、第5戦は決勝ラウンド進出をかけた一番である北京オリンピック4位のハンガリー戦でした。前半は相手を慌てさせて、自分たちが用意していた戦術も成功していて、選手達の運動量も豊富でした。しかし、後半15分過ぎから1点を争う勝負所で疲れが見え始めてから突き放された試合展開となりました。

予選ラウンド4位で決勝ラウンドには進出できませんでしたが、選手たちともう一度下位リーグのプレジデントカップの最上位を目指す事を確認し、気持ちを入れ替えてくれることを期待しながら第1戦のカザフスタン戦を迎えました。前半は守りが広がってしまいましたが、後半からはボールに

コンパクトに守ることができ、速攻の点数も増えて流れよく攻めていたと感じます。何よりも選手らが次の目標に早く切り替えて戦ってくれた事が嬉しかったです。

第2戦のアルゼンチン戦は、自分たちが準備していた戦術の流れと異なった試合展開となりました。戸惑いがあったのも事実で、パスとシュートミスが続いて自滅したゲームとなりました。今まで日本のレベルが上であっただけに、負けは非常に大きなショックであったと思います。但し以前と違ってアルゼンチンも侮れない強さを持っていました。

第3戦のコートジボアール戦は、前日の負けから尾を引かないで誇りと自信を取り戻す為には非常に重要な試合でした。前半立ち上がりから攻撃的な守りからの速攻とセットプレーで得点を重ねながらリードを保ったまま折り返しましたが、また後半失速して追いつかれてしまいました。接戦の末に1点差で劇的な勝利を収めましたが、後半の戦いにまたも大きな課題を残した試合でした。

結果としては残念ながらプレジデントカップの2位で終わり、15位決定戦では南米の強豪であるブラジルとの試合でした。試合のテーマとしては、日本がベースとして考えている戦い方を最後まで信念と誇りを持って戦う事でした。そして、いま現在後半の戦いに大きな課題を抱えているので、その点を全員が認識して粘りのある戦いをするのでありました。結果としては、前半の2点差がそのまま響き、2点差での敗退ではありましたが、選手は諦めないで戦ってくれたと思います。

今後の取り組み

今回の世界選手権の戦いを振り返ってみると、前半は日本の良さであるスピードと豊富な運動量を生かして世界と堂々と戦えましたが、ほとんどの試合が後半中盤以降から失速してしまう傾向でした。

従来からの問題ではありますが、これからの強化ポイントとして考えなければならない大きな課題であると再認識しています。

最後になりますが、女子代表チームの強化活動は勿論、大会を準備・参加するに当たってご理解、ご支援頂きました関係者の皆様には改めて御礼申し上げます。特に、男子高校の各チームの皆様にはやり辛いにも拘わらず快く対戦して頂きました事に感謝しております。

女子代表チームは今回の結果を謙虚に受け止め、世界に通用する強靱なフィジカルとメンタル強さが必要だと再認識しています。このような課題をクリアして強くなれるように取り組んでまいりますので、これからも引き続き皆様方のご声援宜しくお願い申し上げます。ありがとうございました。

戦評

▼予選リーグCグループ

ノルウェー 34 (15 - 9、19 - 10) 19 日本

前半立ち上がり、固さの見える日本に対しノルウェーはディフェンスから連続速攻で4点連取し、ノルウェーペースで試合が進む。日本は4分過ぎ、植垣のロングシュートで1点を取るが、ノルウェーもセットのロングシュートで加点する。6分、植垣の速攻で2点目をあげたところから日本も落ち着きを取り戻し、6-0ディフェンスで積極的にアタックし、ノルウェーのテクニカルミス、速攻のシュートミスを誘う。11分過ぎには、植垣の速攻、坂元のポストで5対7の2点差に追いつく。その後、ノルウェーのセット攻撃にGK田代のファインセーブなどでしのぐが、日本の攻撃ミスによるノルウェーの速攻で得点を奪われ、20分には7対11の4点差となる。その後、20分過ぎに植垣のロングシュート、23分過ぎに上町の7mスローで加点するが、その後の6分間にノルウェーディフェンスを崩すことができず、連続速攻、ポスト・ミドルシュートと4連取され、前半を9対15の6点差で折り返す。

後半立ち上がり、ノルウェーディフェンスはより激しさを増し、日本にいい形での攻撃をさせない。ノルウェーに5連続速攻で得点を奪われ悪いリズムになったところで、日本は、3分14秒に早めのタイムアウトを取る。タイムアウト後も2連続速攻で得点を奪われ、後半5分には9対22の13点差になる。日本は5分過ぎに坂元、伊藤、東濱のカットインで3連取するが、10分過ぎに再びノルウェーに速攻を許し4連取、15分過ぎには14対28の14点差になる。その後もノルウェーは攻撃の手を緩めることなく、カットイン、速攻と得点を重ね、20分には14対31となる。20分過ぎ、坂元、新城、植垣らの得点で5連取し19対31とするが、その後日本は東濱の退場などもあり、数的有利な攻撃のノルウェーにカットイン・サイドと得点を許し、19対34の15点差で試合は終了する。前後半の立ち上がりに課題が残った試合であった。

〈得点者〉植垣8、坂元4、東濱3、藤井・上町・新城・伊藤1

ルーマニア 37 (17 - 17、20 - 11) 28 日本

ルーマニアの5-1ディフェンスに対し、開始3分、植垣のロングシュート、4分、佐久川のサイドシュートの2連取で日本が先制する。日本はディフェンスで積極的なアタックをかけ、警戒していたルーマニアのロングシュート、ポストシュートを素早い詰めで対応する。4分過ぎ、ルーマニアにカットインを許したところから、試合が素早いテンポになる。日本はフォーメーションからの東濱のロングシュート、藤井

の7mスロー、植垣の速攻、佐久川のサイドシュートと得点を重ねていくが、ルーマニアも大型選手のミドルシュート、ポスト、速攻と得点を重ね、19分には10対10の同点となる。その後、ポストにボールを集められ、連続で7mスローをルーマニアに与えるが、日本も好調の植垣が連続ロングシュートによる得点で、前半17対17の同点のまま折り返す。

後半立ち上がり、ルーマニアに2連続得点を許すが、植垣のロングシュート、7mスローで日本も必死についていき、後半5分、20対21のルーマニア1点リードとなる。しかし、5分過ぎから15分までの10分間に日本は、シュートミス、テクニカルミスから佐久川のサイドシュート1得点に抑えられている間に、ルーマニアは積極的な日本のディフェンスの裏をかき、早め早めにディフェンスを引きつけてパスをサイドまで展開し、サイド、ポストにボールを集め6得点を奪い後半15分には21対27の6点差をつけられてしまう。16分過ぎ、日本は佐久川、センターに代わって入った仲宗根のトリッキーなステップシュート、ディフェンス・巻の速攻、藤井の7mスロー、東濱のミドルシュートで追い上げ、20分には4点差の26対30となる。しかしルーマニアも選手交代をして再びディフェンスを強化、速攻を絡めて攻撃をしかけ25分には再び26対33の7点差とする。残り5分、東濱のカットイン、この試合8点目の植垣のロングシュートで応戦するが、28対37の9点差で敗退した。

〈得点者〉植垣8、藤井・佐久川・東濱5、新城2、坂元・巻・仲宗根1

日本 31 (16 - 14、15 - 17) 31 チュニジア

本戦ラウンドに進出する為には、日本もチュニジアも共に負けられない試合であった。前半立ち上がり、日本は3-2-1ディフェンスで、チュニジアの強力なロングシューター(No.24)、センター(No.20)から良い形でパスを入れさせない作戦が機能した。悪いポジションでのシュート、テクニカルミスを誘い、またGK田代のファインセーブもありチュニジアに思い通りの攻撃をさせなかった。その間、日本の攻撃はチュニジアディフェンスを横の速い動きで揺さぶり、前半の8分過ぎ、11分過ぎにチュニジアエースNo.24が2回の退場をしたのを機に、東濱の速攻、藤井・植垣のミドルシュートと得点を重ねた。チュニジアが前半のタイムアウト(16分48秒)を取った時には9対6の3点差となった。その後は、日本が常に2点差をキープし前半は16対14で終了した。

後半立ち上がり、日本のシュートミス、テクニカルミスから速攻に繋がれ、4分32秒には18対19とこの試合初のリードを許した。その後はチュニジアに常に2点差をキープされた状況が続いたが、19分過ぎ、上町の7mスロー、東濱のカットイン、高橋の速攻で22分、27対27の同点に追いついた。25分には29対29となり残り5分間の戦いとなる。残り5分、藤井のカットイン、サイドシュートで31対29と2点リードするが、27分48秒、ディフェンスで競り

合った石立が退場し日本は数的不利な状態になる。その間、チュニジアも粘り強く攻撃し28分4秒、サイドシュートを決め1点差に。残り1分を切ったところでNo.18にロングシュートを決められ31対31の同点で試合が終了する。両チーム共に1枚のレッドカードが出る激しい試合であった。〈得点者〉藤井10、東濱7、高橋4、植垣・新城・上町3、石立1

日本 38 (19 - 13, 19 - 6) 19 チリ

本戦ラウンドへ進むため、どうしても落とせないという緊張の中、試合がスタートした。

立ち上がり、プレッシャーからか、動きの硬い日本に対し、高い運動能力を活かしたチリの攻撃が機能する。対する日本は植垣、高橋の連取で開始7分には5対3とリードをするものの、チリの強引なカットインプレーを阻むことが出来ず、13分に再び7対8とリードを許す。その後、タイムアウトを機に立て直しをはかった日本は、石立、新城らの若手の活躍などで、徐々に引き離し、前半を19対13で折り返した。

後半開始早々、エンジンのかかった日本は、唯一大学生で参加する田邊の得点を含む7連取で開始9分には26対13と一気に突き放した。その後も、ディフェンスから速攻を中心に持ち味を発揮し始めた日本は、ベンチ入りメンバー全員がバランスよく活躍し、38対19で今大会初勝利をものにした。

〈得点者〉藤井・植垣・高橋6、田邊5、新城・仲宗根・石立3、上町・伊藤2、東濱・巻1

ハンガリー 35 (15 - 14, 20 - 14) 28 日本

予選ラウンドの4試合を終えて、1勝1分2敗と、本戦ラウンド進出への望みをつないで迎えた第5戦、ハンガリーとの対決が幕を開けた。双方この試合に勝てば本戦ラウンド進出という重要な一戦だけに、ゲーム前から両チーム共、より気合の入った様子であった。

開始早々、機先を制したのはハンガリー。速攻を絡めたエースTothの活躍で0対3と一気にリードした。しかし、この世界選手権の経験を通したくましさを増した日本チームは、気迫の衰えをまったく感じさせず、GK田代を中心とした堅い守りから速攻へつなぎ、佐久川、植垣の連取で食い下がる。前半戦の中盤、3点～4点差を繰り返しながら必死に食い下がり、徐々に焦り出したハンガリーにつけいく。20分、植垣の豪快なシュートでついに1点差に迫る。その後も、藤井、佐久川の連取で一進一退の状態が続く、前半終了間際、2点ビハインドで迎えた最後の攻撃を、仲宗根の職人技ともいえるランニングシュートで1点差に迫り、前半を終了した。

課題の後半立ち上がり10分。これまでの日本チームなら、ここで一気にねじ伏せられるパターンが多かったが、この日の日本チームは驚異的な粘りを見せた。エースコンビの藤井、

植垣が炸裂し、機動力あるディフェンスで守り、GK田代も好守を連発。後半18分を経過して2点のビハインドをキープした。しかしなかなかリードを奪えないまま、ラスト10分に突入。ここからハンガリーは、日本の細かなミスやシュートミスを見逃さず、速攻に転じる。残り8分から5分にかけて3連取を許し、26対32と突き放される。残り5分、粘る日本だったが、点差を縮めることができず28 - 35で試合終了となった。

予選リーグ最終順位を4位とし、惜しくも本戦ラウンド進出は逃したが、ヨーロッパ勢相手にも互角に戦える局面を見出すなど、収穫も多い戦いとなった。残るプレジデントカップの4試合、ここで成長の証を示したい。

〈得点者〉藤井8、佐久川・植垣7、東濱・巻2、新城・仲宗根1

▼プレジデントカップ PC 2グループ

日本 33 (15 - 11, 18 - 6) 17 カザフスタン

予選ラウンドを4位で終え、プレジデントカップに進んだ日本の相手はカザフスタン、アジア勢同士の戦いとなった。大会屈指の大型選手を要するカザフスタンは、今大会も体型の利点を活かした戦いを重ねている。日本は体格差をカバーすべく、機動力を武器として戦いに挑んだ。

立ち上がり、日本は植垣、新城、藤井、坂元、東濱とバランスよく得点を重ね、5対2とリードし、危なげなく試合を進めるかのように見えた。しかしカザフスタンも粘り、持ち前の大型ポストを活かしたダブルポスト攻撃で反撃を開始。4連取を含め、19分には6対9とし、瞬く間にカザフスタンがリードした。タイムアウトをはさみ立て直しをはかった日本は、カザフスタンのダブルポスト攻撃を積極的な防御で抑え始め、25分からの5連取で15対11と4点リードで前半を終えた。

後半立ち上がり、石立をゲームメーカーとした大きな展開が機能し、3連取により18対11と一気にリードを広げた。その後13分まで、双方とも相手の攻撃によく対応し、一進一退の展開が続く。抜け出したのは日本、疲れの見え始めたカザフスタンからミスを誘い、14分過ぎから6連取。22分、カザフスタンに1失点を許したものの、再び6連取と速攻を主に連取し、カザフスタンを退けた。

〈得点者〉藤井9、田邊5、新城4、佐久川・坂元・巻3、上町2、高橋・植垣・東濱・石立1

アルゼンチン 25 (15 - 12, 10 - 12) 24 日本

試合開始2分、新城のサイドシュートで先制するも、その後、アルゼンチンの粘りのディフェンスを攻略できず、日本らしいボールを動かしての攻撃ができない。不利な体勢でのシュートをGKに阻止され、逆にアルゼンチンの連続速攻を許し、5分過ぎには1対3とリードを許す。その後は植垣の

ロング、藤井のロングで得点をあげるが、アルゼンチンも攻撃でポストシュート、カットインと得点を重ね、20分過ぎまで9対12と常にアルゼンチンがリードして前半が進む、20分過ぎ、新城に代わって入った田邊の連続速攻で得点をあげるが、12対15の3点リードを奪われ前半を終了する。

後半開始、藤井のロングで得点をあげるが、前半同様にアルゼンチンの粘りのオフェンスにどうしても連続得点を奪えない。途中、石立を投入し4-2ディフェンスで積極的にボールを奪いに行く。ディフェンスを変えたことでアルゼンチンの攻撃にミスが出始め、後半7分過ぎからの石立、藤井、田邊、佐久川の連続得点により、この試合初めて18対18の同点に追いつく。その後は両チーム共に得点をあげるが、後半19分過ぎ、東濱のカットインが決まり、23対22とこの試合初めてアルゼンチンからリードを奪う。この後は両チーム共に意地の張り合いとなるが、日本は決定打を決めることができない。残り2分を切ったところで再度アルゼンチンにリードを奪われ、24対25とリードを許す、日本は最後の攻撃に望みをつないだが得点を奪うことができず惜敗となった。

〈得点者〉藤井 8, 植垣・田邊 4, 新城・佐久川・東濱 2, 坂元・石立 1

日本 32 (16 - 11, 16 - 20) 31 コートジボアール

アフリカ代表のコートジボアールとの一戦を迎えた。コートジボアールは新興勢力ではありながら、先日はチュニジアを一時追い詰めるなど、大会屈指の体格とパワーで、非常に高い潜在能力を有している。不気味な存在ではあるが、先日の敗戦を引きずらず、思いきりの良い戦いを誓い、ゲームに向かった。

立ち上がり、コートジボアールのスピーディーでパワフルな展開に苦戦を強いられながらも、相手の戻りの悪さをついた速攻と、横への揺さぶりを強調した攻撃で、10分まで6対3と辛くもリードを保つ。その後も双方持ち味を発揮し、お互い譲らないまま、23分までに11対9と均衡した展開が続く。最初に抜け出したのは日本、GK 田代の好セーブをきっかけに坂元、東濱、上町と連取し5点差をつけると、そのままのリードを保ち、16対11で前半を終える。

後半の出だしも日本ペース。キャプテン藤井の連取などで、開始5分には20対12とリードを広げる。ここで一気に勝負をつけるかに見えたが、コートジボアールも引き下がらない。この日、脅威の14ゴールをあげた、9番の大型ながら巧さもあわせもつポスト・Gondoの活躍で、徐々に日本を追い詰める。さらにはパワーヒッターの5番 Mambo が良く機能し、23分にはついに同点に。ここから日本もよく粘り、必死にもぎとった7m スローを上町がしっかりと決め29-28、しかし直後にコートジボアールエース Mambo の強引なプレーで再び同点。すかさず日本も高橋の粘り強いサイドシュートで30対29とすると、落ち着くまもなく9番

Gondoのポストで同点。その後も互いに一步もひかないまま伊藤、Gondoで取り合い、残り1分30秒で日本が7m スローをもぎとった。シューターは上町、惜しくもGKに阻まれピンチかと思われた瞬間、ルーズボールを高橋ががちりつかみ、上町が押し込んで32対31、残り1分の防御が始まる。この日、再三苦しめられたGondoによって強引なポストプレーを徹底してくるが、最後は意地で守り通し、苦し紛れのロングシュートを田代が落ちていて阻止し、試合終了。苦しみながら価値ある白星を勝ち取った。

チュニジアにつぎ、プレジデントカップ予選リーグを2位で終了し、15位-16位決定戦への進出が決まった。

〈得点者〉藤井・高橋・上町・植垣 5, 東濱・田邊 3, 新城 2, 坂元・仲宗根・巻・伊藤 1

▼15位-16位決定戦

ブラジル 31 (19 - 17, 12 - 12) 29 日本

世界選手権最終戦、15-16位決定戦。東濱のカットインで先制する。ブラジルは個人の身体能力が高く、スピードあるサイドの速攻、また大型バックプレーヤーのロングシュートと満遍なく得点をあげてくる。日本も藤井、植垣を中心に、田邊が速攻で得点をあげるなど、前半は一進一退の展開を繰り返すが、前半はブラジルの2点のリードで折り返した。

後半は前半と対照的に両チームともにディフェンスを積極的な内容に変えたが、それにより両チームともにミスが発生し思うように攻撃ができない。後半9分過ぎ、高橋の速攻で21対21の同点に、さらに新城のサイドシュートで連続得点を奪い、22対21とし、この試合初めてリードを奪う。その後も日本は粘り強くディフェンスを行い、石立の速攻、藤井のロングシュートで得点を奪うが、ブラジルもカットイン、ポストシュートで得点をあげる。後半16分過ぎ、ディフェンスで若干の疲れがでた日本に対し、ブラジルのポスト、サイドシュートなどで4連続得点を奪われ、後半20分には25対29の4点差になる。日本はそれでも粘りをみせ、東濱のカットイン、田邊の速攻、藤井のロングシュートで残り5分28対29の1点差に追い上げる。その後、両チームともに決定打を決められず、残り1分30秒となったところで、ブラジルに2連続カットインを許し、日本も田邊のサイドシュートで得点を奪うが、2点差で敗退となり16位で大会を終えた。

〈得点者〉藤井 9, 植垣 6, 田邊 4, 東濱・高橋 3, 新城・石立 2

▼3-4位決定戦

ノルウェー 31 (15 - 9, 16 - 17) 26 スペイン

▼決勝

ロシア 25 (14 - 11, 11 - 11) 22 フランス